### 不屈の海1

#### 「大和」撃沈指令

## 横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

# 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1~20頁までを収録したものです。

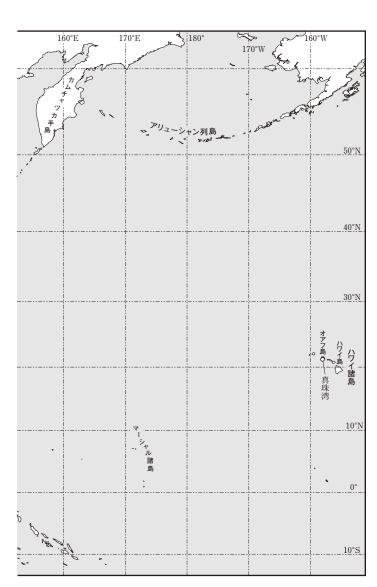
#### ページ操作について

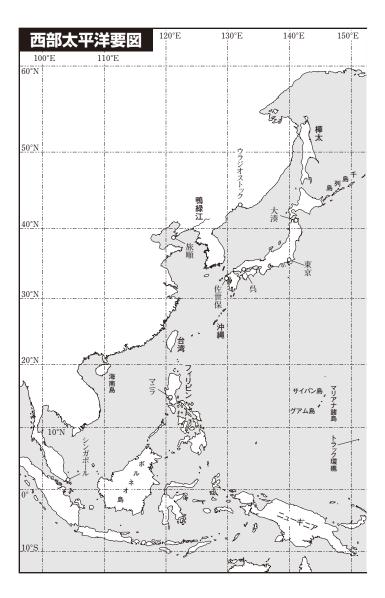
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上 記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- ●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。
- ●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

編集協力 らいとすたっふ地図・図版 安達裕章

目	次
序章	
第一章	英雄、海に消ゆ
第二章	寒風の出航
第三章	狙われた巨艦
第 四 章	宿毛湾に死す
第五章	ハワイ沖遭遇戦
第六章	復活への闘志

235 143 103 77 51 15 9







序章

時折吹く風が立てるさざ波以外に、海はべた凪だった。

きはない
時折吹く風が立てるさざ波以外に、動きらしい動

波浪の影響が少ない静かな海だが、この日は特に穏はいる。 高知県南西部に位置する宿毛湾は、もともと風やきませば、

やかだった。

第五三号駆潜特務艇の艇長梅田仙吉特務少尉は、出漁できないなんて」 はまきもないなんて」 これないい日に見けたちがぼやいてるだろうな。こんないい日に

海面を眺めながら呟いた。

勤めている。 生まれ、三人の兄は全員漁師になり、弟は町役場に 梅田は、宿毛町の漁師の出だ。五人兄弟の四男に

だが、この日――昭和一六年一二月七日は、宿毛マダイが旬だ。船を出せば、大漁が期待できる。今の時期は、ブリやヨコ(クロマグロの子)、グレ、

保持を理由に、周辺漁村に出漁を禁じていた。

湾で新鋭艦の公試が行われるため、

帝国海軍は機密

島が丸ごと動いているような威容を誇る巨艦だ。第五三号の右前方に、新鋭戦艦の姿が見える。

をがと むっ とりんそく 無形は、帝国海軍の象徴として、国民に親しまれ

艦体は中央から艦首にかけて僅かに反り上がり、る高速戦艦金剛型とは大きく異なる。

剣豪が構えた名刀を思わせる。

主砲塔の大きさも、砲身の太さ、長さも、主砲塔は前部に二基、後部に一基だ。

艦橋は、長門型以前の戦艦に比べ、すっきりし見慣れている長門型のそれを上回る。

た印象だ。

め、凹凸が少ない。
この新鋭艦は最初から最新の装備を搭載しているたこの新鋭艦は最初から最新の装備を搭載しているた追加したため、凹凸の多い複雑な形状になったが、追門型以前の戦艦は、近代化改装に伴って兵装を

大和型戦艦の一番艦「大和」。

来、二〇年近くに亘って戦艦の新造を行って来なか た最新鋭戦艦が公試に臨まんとしている。 った帝国海軍が、長い雌伏の時を経て世に送り出し 大正一〇年にワシントン軍縮条約が締結されて以

務艇が付き従っていた。 「全長は、二六〇メートルから二七〇メートルって

第五三号の他、姉妹艇の第五一号、五二号駆潜特

とこですかね」

航海長の大沼太郎兵曹長が言った。

漁業用の小型漁船と、さほど変わらぬ大きさだ。 大幅四・八メートル、基準排水量一七〇トン。沿岸 第五一号型駆潜特務艇は、全長四五メートル、最

上は、約二七〇メートルと見積もられる。 「大和」の長さは、第五一号型のざっと六倍。計算 横幅ははっきり分からないが、全長がこれだけ巨

大なのだから、全幅も相当なものだろう、との想像

- 最低でも五万トンはあるだろうな。 ひょっとする 排水量はどれぐらいあるんでしょうか?」

艇長付の茅野一平一等水兵に、梅田は答えた。と、六万トンまで行くかもしれん」

帝国海軍が配備している戦艦のうち、最大の巨軀

排水量も確実に「長門」のそれを上回る を誇る「長門」の基準排水量は三万九一二〇トンだ。 「大和」は「長門」より一回りは大きいから、

五割増し、金剛型の倍近いことになる。 紛れもない、帝国海軍最大の軍艦だ。 仮に六万トンを超えるようであれば、「長門」の

いや、世界最大と言っていい。

実力も大きさに見合うだけのものであることは、

巨大な主砲塔を見れば明らかだ。

軍の象徴として、国民に親しまれて来た。 これまでは、「長門」「陸奥」の二戦艦が、 帝国海

と歌われている通り、国民の多くは「長門」「陸奥」 いろは歌留多に「『陸奥』と『長門』は日本の誇り」

こそ世界最強の戦艦であると信じてきた。

頂点に君臨することは間違いない。 今後は帝国海軍 その「長門」「陸奥」を超える艦が現れたのだ。 梅田らの目の前を悠然と航行している「大和」が、 ――いや世界最大最強の戦艦として、

(ただし、そいつは二ヶ月ほど先だ)

出している。 呉鎮守府の高官から聞かされた話を、梅田は思い

竣工するはずだった。 当初の計画では、「大和」は一二月一〇日前後に

原因だ。 それが二ヶ月ほど後ろにずれ込んだのは、計画段

安を、梅田は感じている。 来年二月で大丈夫なのか――そんな漠然とした不

置かれていることは知っている。 小艇の艇長でも、 現在の日本が容易ならぬ状況に

> まった欧州の大戦は激化の一途を辿っており、太平 一昨年、ドイツのポーランド侵攻をきっかけに始

洋にまで波及しそうな様子を見せている。

る米国と対立する構図になる。 の交戦国である英国、その背後で英国を支援してい 日本はドイツと同盟関係にあり、必然的にドイツ

特に日米両国の対立は、日増しに緊張の度を高め

くない」との噂があるほどだ。 下士官や兵の間でも、「いつ火を噴いてもおかし

はない。 「大和」が竣工しても、すぐに戦力化できるわけで

慣熟 訓練には、最低でも半年はかかる。 駆潜特務艇のような小艇と異なり、巨大な戦艦の であっても、心配せずにはいられなかった。 そのことを想像すると、裏方の仕事に就いている身 「大和」を戦力化する前に、米国と開戦したら

『大和』増速します!」

員の池内良太二等兵曹が報告した。 見張長の前田俊二一等兵曹が叫び、次いで信号記するのが立た 号より信号。『我ニ続ケ』」

梅田は「大和」を見た。

艦首付近の海面が泡立ち、島のような巨体が速力

大和」に追随すべく増速している。 随伴する駆潜特務艇二隻 ——五一号、 五二号も、

を上げている。

機関長、両舷前進全速!」

|航海、舵中央。針路そのまま!|

梅田は、二つの命令を発した。

両舷前進全速、宜候」

舵中央。針路そのまま、宜候」

に続いて増速する。 機関の唸りが高まり、第五三号も、二隻の僚艇。とは、は、東京ののでは、大沼航海長が復唱を返す。というでは、大沼航海長が復唱を返す。

艇だが、小型漁船並みに身軽であるため、 機関出力三〇〇〇馬力、最高速度二三ノットの小 加速性能

ってゆく。

は良好だ。一旦開きかけた「大和」との距離が縮ま

『大和』、現在一六ノット」

『大和』との距離二○ (二○○○メートル)」

前田見張長が「大和」の動きを知らせ、次いで砲

術長長田茂一等兵曹が報告する。

機関は正常に動き、世界最大の巨艦を一六ノット 今のところ、「大和」の公試は順調のようだ。

で走らせている。

『大和』との距離一六(一六〇〇メートル)」

予想していなかった報告が飛び込んだ。

長田が新たな報告を上げたとき、梅田がまったく

「爆音が聞こえます。飛行機のようです」

爆音だと?」

呉鎮守府からの通達によれば、公試の間、 梅田は首を傾げた。

の航空機の接近は禁止されていたはずだ。 通知が届かなかった航空隊があるのか、それとも

陸軍の機体か。

ほどなく梅田にも、爆音が聞こえ始めた。

梅田は、「大和」に視線を転じた。

のいい空中聴音器が装備されているはずだ。「大和」には、駆潜特務艇のそれよりも遥かに性能 爆音には気づいていると思われるが、艦の動きに

「一機や二機じゃないぞ、こいつは」 梅田は、誰にともなしに言った。 爆音が、更に拡大した。

「いったい何でしょうね?」 大沼が眉をひそめ、不審そうな声を上げた。

言いたげだ。 何が起ころうとしているのか、理解し難い――と

部下に何か指示を出すべきかもしれないが、与え 梅田自身も、状況が分からない。

るべき指示が分からない。 迫る爆音を聞き、「大和」の動きを見守りながら、

> 艇の動揺に身を任せるだけだ。 「敵味方不明機約二〇! 右六〇度、高度三〇(三

〇〇〇メートル)!

前田が切迫した声で叫んだ。

梅田は、右舷側に目を凝らした。接近して来る機

影が、視界に入った。 前田が報告した通り、三〇〇〇メートル前後の高

度から距離を詰めて来る。

「接近せる機体は友軍機にあらず。識別表にない機 「大和」の前方へと、回り込みつつあるようだ。

体です!」

前田が悲鳴じみた叫びを上げた。

速に高度を下げ始めた。 爆音を轟かせながら「大和」の左右に展開し、 急

第一章

英雄、

海に消ゆ

1

ない港の空気を震わせた。出港を告げるラッパの音が、日が没してから間も

「駆逐艦六隻、出港します。続いて『ケルン』『二端を巻き上げる音が響いた。」フランスの北西部に位置する要港ル・アーブルに、

輸送船「インゲボルグ」の船橋に、見張員が報ュルンベルク』出港します」

少将は、港内に目を凝らした。 ドイツ陸軍第七装甲師団長エルウィン・ロンメル 告を上げた。

がら港外に向かってゆく様子が見て取れた。を持つ軽巡洋艦と駆逐艦が、標識灯を点滅させな灯火管制が敷かれている港から、スマートな艦影

また、新たな報告が上がった。「『グナイゼナウ』出港します」

対立し、最終戦争で世界を滅ぼしてしまう種族を思艦だ。北欧神話に登場する巨人――天界の神々と最初に出港した八隻とは、比べものにならない巨「インゲボルグ」の左前方で、巨大な影が動いた。

隻が、船団の頼もしい護衛として、出港しようとし言後に建造された、ドイツ海軍の新しい主力艦の一巡洋戦艦「グナイゼナウ」――ドイツの再軍備宣わせる。

「前進微速」

前進微速

船底から鼓動が伝わり、「インゲボルグ」はゆっじ、航海長カール・ツォッセンが機関室に伝えた。「インゲボルグ」の船長ハンス・フィンクラーが命

くりと前進を開始した。

日没を迎えてから間もないフランスの要港から、見張員が、僚船の動きを報告する。

『エッダ』『ヒルデガルト』本船に続いて出港\_

に指示を送る。

喫水を深く沈めた輸送船が次々と出港し、 かってゆく。 キール、ブレーマーハーフェンといったドイツの 外海に向

だが、何分にもル・アーブルは四ヶ月前まで敵地だ 港であれば、市民が歓呼の声で送ってくれるところ った場所だ。

民は港内への立ち入りを禁止されていた。 そもそも、船団の出港自体が軍事機密であり、 市

時間余りを要した。 戦闘艦艇九隻は前方に展開し、船団を先導すると 船団が港外に出て、隊列を整えるまでに、

共に、護衛する態勢を取っている。 その後方に、「インゲボルグ」を始め、二二隻の

輸送船が付き従っていた。 『グナイゼナウ』より信号。『速力一〇ノット』」

速力一〇ノット」 信号長の報告を受け、ツォッセン航海長が機関室

> 空に雲はなく、無数の星々が天空を彩っている 船団は夜の闇 船橋の時計は、 の中、北に向かって進み始める。 二〇時三一分を指してい

他の艦船の姿は、ほとんど見えない。マッチの火 海面はまったき闇に包まれている。

「フランス時間で四時半から五時半の間です。 現地到着は何時になる?」

現地

ほどの標識灯で、辛うじてそれと分かる程度だ。

時間では三時半から四時半の間となります」 ロンメルの問いに、 等航海士のマルティン・ブ

レットナーが答えた。

およそ八時間の航海 ロンメルは、前方の闇を見据えた。 か

明日の夜明けには、ロンメルが率いる第七装甲師

り、連合軍から「幽霊師団」と呼ばれて怖れら 団の精鋭がイングランドに上陸する。 れた部隊が、今度はイギリス本土で本領を発揮する。 フランス進攻作戦では、ずば抜けた進軍速度を誇

抜けられれば、との前提条件がつく。 ただし、それには上陸までの八時間を無事に切り

しかも自分が乗っているのは、無防備な上に低速 地上戦の勇将も、 海の上では無力だ。

の輸送船だ。

できれば、昼間に渡りたかったところです」 英海軍の艦艇に襲われたら、ひとたまりもない

めたのだ。

作戦参謀ヴァルター・ケーニヒ少佐が言った。 ロンメルの傍らに付き従っている第七装甲師団の

げだった。 陸軍総司令部は何を考えているのか――と言いた

変わる。戦友たちが、橋頭堡を確保し続けている んだ。多少の危険は止むを得まい」 増援の到着が半日早いか遅いかで、戦況は大きく

な口調で答えた。 ロンメルは、部下よりも自身に言い聞かせるよう

司令官ヘルマン・ゲーリング国家元帥は、 ――九四〇年九月一七日、ドイツ空軍総

「ドーバー上空に敵機なし」

と宣言した。

ドイツが、今また英本土を巡る航空作戦で勝利を収 快進撃を続け、ヨーロッパの過半を支配下に収めた 昨年九月一日に始まったポーランド進攻作戦以来、

や、主力戦闘機メッサーシュミットBf109Eの 英本土航空戦は、イギリス軍に地の利があること

を強いられた。

航続性能不足もあって、さしものドイツ空軍も苦戦

部の制空権を握ったのだ。 奏功し、ドイツは辛くもドーバー海峡と英本土南雲 \*うこう から かいきょう かいきょう よ」という空軍総司令部が定めた作戦方針の徹底が 戒網の破壊や、「敵航空兵力の撃滅を第一目標とせ だが、 英本土に張り巡らされたレーダーによる警

戦を発動した。 ラーは、「あしか」の呼称が冠された英本土進攻作 九月二〇日、ナチス・ドイツ総統アドルフ・ ヒト

国防軍総司令部の 中

進攻とは勝手が違います。 海上封鎖で屈服させては? 渡海作戦は、 陸続きのポーランドやフランスへの イギリスは、 航空攻撃と

らぬ。このときを逃せば、 アメリカが対英援助に踏み切った以上、 と慎重論を唱える者もいたが、 機会は永久に失われる」 ヒトラー 

との理由で押し切った。

八月二四日、

ギリスへの武器援助が始まっている。 大西洋の向こうから、 アメリカで武器貸与法が成立し、 大量の武器がイギリス本土

土の防衛態勢が強化されることを警戒し、その前に に運ばれて来るのだ。 ヒトラーは、 アメリカの武器によってイギリス本

スエンドに上陸し、 の第一六軍団が第一 イギリスを屈服させようと考えたのだった。 ○月七日、 エーリヒ・ヘープナー上級大将麾下 陣として、テムズ川河口 翌一〇月八日、 ヘルマン・ lのサウ ホ

1

収しているという寸法だ。

ティングスに上陸した。

上

一級大将麾下の第一五

軍団

が、

英本土

南岸の

ヘイ

第一六軍団はテムズ川に沿って西方に進 撃し、 第

ところが、第一六軍団も、第一五軍団も、 英本土

思うに任せなかった。 の一角に橋頭堡を確保しただけで、内陸への進撃は

イ

猛然と反撃に出たのだ。 イギリス軍は、本土に温存していた兵力を投入し、

軍機が飛来したときには、夜が明け、フランスの飛 活発になる夜間に行われ、ドイツ軍の損害を累積さ せて行く。 イギリス軍の反撃は、 フランスの飛行場に展開したドイツ空 主として航空機の活動が不 イギリス軍はさっさと撤

20 潜水艦を展開させ、 送船を襲撃する。 ギリス海軍は、 ドーバー海峡やイギリス海峡に 増援部隊や補給物資を載せた輸

ロンドンへの進攻どころか、橋頭堡の確保すら困難 第一六軍団、第一五軍団は消耗の一途を辿り、

な状況に置かれた。

な増援を決定し、ロンメルの第七装甲師団とアドル フ・クンツェン少将の第八装甲師団に、 イギリス派遣軍の苦戦を見たヒトラーは、大規模 ヘイスティ

四日の未明に、 予定では、 に、ル・アーブルより出港する手筈にな第七装甲師団を運ぶ輸送船団は一一月

ングス派遣の命が下されたのだった。

っていた。

弾薬のル・アーブル搬入が半日遅れたのだ。 ところが部隊の輸送計画に手違いが生じ、

部隊や潜水艦の襲撃が危惧されます」 |夜間の海上移動は危険です。 イギリス海軍の水上 護衛部隊の指揮を執るマクシミリアン・ハウプト

> とするよう主張した。 海軍少将はそう主張し、 ドーバー海峡の制空権は、 出港を一一月五日の夜明け ドイツ空軍が握 つてい

空からの攻撃で撃退が可能なのだ。 る。昼間であれば、英海軍が船団の阻止を試みても、

だがOKHより、

燃料、弾薬の積み込みが完了し次第出港せよ」 との命令が届いたため、船団は空軍の活動が不活

発になる夜間に、八○ 浬 離れたヘイスティングス へと向かうことになったのだ。

で船団を発見するのは至難です」 すな。水上部隊であれ、 「こうなってみると、視界不良なのはありがたいで 潜水艦であれ、 この闇の中

見張員は、梟並に夜目が利く、なんて話を聞いたこ「盟邦日本の海軍は、夜間戦闘に力を入れていて、

とがありますがね。イギリス海軍には、そこまで夜 目の利く見張員はいないはずです」

フィンクラー船長がロンメルに話しかけ、ツォ ッ ★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF